

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

食卓生活史の調査と分析：食卓生活史の量的分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 忠司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003578

2 食卓生活史の量的分析

井 上 忠 司*

2・1 アフター・コーディング

本調査のデータは、ほんらい質的なものである。「チェックリスト」の項目にしたがって、あくまでも被調査者に自由に語ってもらったものを記録しようとしたものである。したがって、それらデータの質的分析こそは、われわれが当初よりもくろんできた考察の中心にほかならない。

いっぽう、われわれはデータが収集されていくにつれて、質的な処理だけでなく、コンピュータをもちいて量的にも処理してみてはどうか、とおもうようになった。銘々膳からチャブ台へと移行した時期の平均は、いったい何年ごろのことであろうか。あるいは、銘々膳の時代とチャブ台の時代とでは、食事の作法に、はたしてどの程度の相違がみとめられるであろうか。われわれは個別のデータをにらみながら、食卓生活史の全体的な傾向をつかんでみたい、としたいとおもうようになったのである。

データの量的な処理（アフター・コーディング）にあたっては⁵⁾、まず調査の性格上、「はこぜんライフ」と「チャブ台ライフ」と「テーブル・ライフ」の3つの時期に大別した。そして、「基礎票」と「チェックリスト」にもとづきながら、105におよぶ項目をかかげ、被調査者の回答から得られた内容をもとにそれぞれのカテゴリーを設定して、その番号をコーディングしていくようにつとめた。

もっとも、食卓の形式の変化は、われわれが調査にさきだって仮定していたような、「銘々膳」→「チャブ台」→「(椅子式) テーブル」という順序のケースばかりではなかった。おおむねその方向を示していたとしても、実態はもっとバラエティにとんでいたのである。おおざっぱに整理してみると、それらは、およそ次の3つの型にまとめることができる(表4)。

第1のカテゴリーは、われわれの仮定どおりの型である。かりに「単数標準型」と

* 甲南大学文学部 国立民族学博物館 第1研究部(客員)

5) アフター・コーディングに際しては森田三郎氏(甲南大学文学部教授、国立民族学博物館共同研究者)にご教示をたまわり、また、アフター・コーディングの実務については、元岡尚子さん(甲南大学森田ゼミOG)のご協力を得た。とくにしるして、深謝の意を表する。

表4 食卓の変化の方向

-
- ① 〈単数標準型〉銘々膳→チャブ台→(椅子式)テーブル(「こたつ」をふくむ)
(結婚前+結婚後)
- ①' 〈①の亜型〉
- a 銘々膳→チャブ台→
 - b チャブ台→
 - c チャブ台→テーブル→
- ② 〈複数標準型〉銘々膳+チャブ台→チャブ台→テーブル
- a 使用人のみ
 - b 子ども+使用人
 - c 祖父母のみ
- ②' 〈②の亜型〉銘々膳+チャブ台→テーブル
- ③ 〈ジグザグ標準型〉チャブ台→銘々膳→チャブ台→テーブル
(奉公先で) (結婚後)
- ③' 〈③の亜型〉銘々膳+チャブ台→テーブル→チャブ台→(こたつ)
(使用人のみ) (転勤先で) (結婚後) (現在)
-

よんでおこう。ただし、それには「a) 銘々膳→チャブ台→」と「b) チャブ台→」
と「c) チャブ台→テーブル」の、3つのサブ・カテゴリーがみとめられる。a) とb)
はともに、今日でもなお「チャブ台」が使用されつづけているケースであり、b) と
c) はともに、被調査者に「銘々膳」の記憶がまったくない場合である。

じつをいうと、「銘々膳」から「チャブ台」をとばして、いきなり「テーブル」と
なっためずらしい例が、1例だけあった。この被調査者(明治36(1903)年生まれで
当時81才)は、大阪府下の農家の出身で、結婚後もやはり実家からさほど遠くない地
の農家で過ごした。彼女の家庭では、「戦後ぐらいまでずっと箱膳(「お膳」とよんで
いたが)を使い、その後は、テーブルと椅子を使用するようになり、チャブ台の時期
はなかった」ということである。

第2のカテゴリーは、「銘々膳」の時代に、すでに「チャブ台」が併用されていた
ものである。かりに「複数標準型」とよんでおきたい。ただしそれには、「銘々膳」
をもちいているのは、「a) 使用人のみ」と、「b) 子ども+使用人」および「c) 祖父
母のみ」の、3つの場合がみとめられる。なお、「銘々膳+チャブ台」からいきなり

「テーブル」へというサブ・カテゴリーがあることも、指摘しておかねばならないだろう。

第3のカテゴリーは、かりに「ジグザグ標準型」とでもよぶべきような型である。具体的にいえば、実家での「チャブ台」にはじまり、奉公先で「銘々膳」を体験し、結婚後ふたたび「チャブ台」にもどる、というものである。そのサブ・カテゴリーのひとつに、「銘々膳（使用人のみ）＋チャブ台→テーブル（転勤先で）→チャブ台（結婚後）」のような型をみとめることができる。

いずれにしても、「銘々膳」→「チャブ台」→「(椅子式) テーブル」の流れが基本をなしていることに、かわりはない。第1と第2と第3のカテゴリーをともに、われわれが「標準型」とよぶゆえんである。

データの量的な処理については、当初よりデザインされたものではなかった。いくつかの困難がつきまとったことは否めない。調査者が一定のトレーニングを受けた専門家ではないので、データのまとめ方にある程度のばらつきが生じるのは、やむをえぬことであった。問題はむしろ、被調査者のあいまいな回答をどのようにコーディングすればよいか、という点にある。

たとえば、「銘々膳」から「チャブ台」にかわった年代を、ある被調査者は（さきのM.Y.さんのように）「大正××年」というふうに、具体的な年号をあげている。が、かなりの被調査者は、「昭和の初めごろ」というふうに、およその年代をあげるにとどまっているのである。前者のような場合ならば、そのままの数値をコンピューターに入力することができる。問題なのは、後者のような場合をどうするか、である。しかも、被調査者のむかしの記憶にたよれば、後者のようにいくぶんあいまいな表現となるのが、ふつうであろう。

そこでわれわれは、つぎに示すように、被調査者の表現におうじて一定の平均的な数値に換算して、その年号をあてることにした。1900年代は、ここでは以下、すべて100台の番号であらわすことにしよう。したがって、昭和元(1926)年ならば、126とコーディングすればよろしいわけである。ただし、不明の回答については不明ぶんのぞき、あらかじめ平均値を出しておいて、その数値をあてることにした次第である。

- ・「明治の末ごろ」は、明治43(1910)年、つまり110とする。
- ・「大正の初めごろ」は、大正4(1915)年、つまり115とする。
- ・「大正の中ごろ」は、大正7(1918)年、つまり118とする。
- ・「大正の末ごろ」は、大正14(1925)年、つまり125とする。
- ・「昭和の初めごろ」は、昭和5(1930)年、つまり130とする。

表5 アフター・コーディングの実例 (M.Y.さんの場合)

1	調査票番号	002	47	食器収納場所	-1	
2	記録者名	K.T.	-1			
3	調査日	830723	48	共用食器種類	-1	
4	被調査者氏名	M.Y.	-1			
5	性別	f	49	共用食器盛りつけ内容	-1-1	
6	生年	095	50	共用箸箱開始時期	-1-1	
7	年齢	88	51	共用箸箱終了時期	-1-1	
8	第何子	5	52	箸箱の上げ下ろし規制	-1-1	
9	出生地※	28106	53	食べる順序規制	-1-1	1
10	生家職業	1	54	食事中お喋り規制	-1-1	1
11	生住所	28106	55	食事中姿勢規制	-1-1	1
12	住所変更とその他	28110-T6	56	食事中禁止事項	-1-1	6・9
13	最終学歴	4	57	食事中開始挨拶	-1	3
14	結婚した年齢	117	58	食事中終了挨拶	-1	ごっつおさん
15	結婚形式	23	59	食事中話題提供者	-1-1	
16	食事調査者と関係	は - ち - ち	60	食事中主話題	-1	
17	備考1	母方の	61	備考2		
18	食事形式	現在の				
19	食事形式呼称	は				
20	食事形式開始年	b				
21	食事形式終了年	113				
22	食事家族構成(種類)	3				
23	家族人数	6				
24	家族使用人数	-1-1				
25	住所	-1-1※				
26	住環境	28106				
27	食事室呼称	1,2				
28	食事室利用例	台所				
29	食事室大きさ	6				
30	食事室情景	-1-1				
31	食事席順	1・2・13				
32	一緒に食べたか	1・2				
33	食べる場所	-1-1				
34	座布団の有無	-1				
35	特別食は誰か	-1				
36	給仕係は誰か	-1				
37	ようす順序	-1-1				
38	神お供え	-1-1				
39	晩酌の有無	-1-1				
40	食後茶碗箸湯茶	1				
41	食器のさげ役	-1-1				
42	食器のさげ役	-1-1				
43	食器洗った	-1-1				
44	食器洗った	-1-1				
45	食器置いた	-1-1				
46	洗った	-1-1				

※ 自治省行政局振興編『全国市町村要覧59年度版』第一法規出版KK、1983(昭和59)年参照。

- ・「戦前」は、昭和10(1935)年、つまり135とする。
- ・「戦後」は、昭和25(1950)年、つまり150とする。
- ・「昭和20年代」は、昭和25(1950)年、つまり150とする。

アフター・コーディングの実例(サンプル)として、さきにあげた明治28(1895)年生まれのM.Y.さん(当時88才)のケースの一部をあげてみよう(表5)。項目のコード番号の内訳は省略する。わずか一例(しかもその一部)にすぎないけれど、アフター・コーディングの実際と雰囲気は、彼女の質的データと照合ねがえれば、だいたいおわかりいただけるであろう。

2・2 食卓形式の移行時期

一般の家庭においてチャブ台が使用されるようになったのは、明治も中ごろからであって、大正になって都市で流行し、やがて農山漁村にもひろく普及するようになっていったといわれる。けれども、われわれの調査にみるかぎり、「銘々膳」から「チャブ台」へと移行した時期は、かならずしも一様ではない。

われわれの聞き取り調査によれば、チャブ台の登場の時期は、大正から昭和の初めにかけてのほうが多いようにおもわれる。ただし、明治の事例もあれば、昭和といっても20年以後の事例もあった。言いかえれば、戦後もまだ地方の農家では、銘々膳がつかわれている家庭もあったのである。

それではいったい、食卓の3つの型式がそれぞれ普及していった過程の軌跡は、どのようなカーブを描いているのであろうか。「銘々膳」から「チャブ台」へ、あるいは、「チャブ台」から「テーブル」へと移行した時期は、いつごろなのであろうか。次の図3は、アフター・コーディングの結果から、コンピュータ処理をして、食卓の3型式の移り変わりを一望のうちにおさめてみようとしたものである。ヨコ軸は年次をきざみ、タテ軸は284例中の件数を示す。およその数値とはいえ、この図3は、いくつかの興味ぶかい事実を物語ってくれているようにおもわれる。

第1は、「銘々膳」が「チャブ台」にとってかわられたのは、大正の末(図2では大正14(1925)年)ごろであったらしいことである。1920年代から30年代にかけて、チャブ台の普及は急上昇をつづけている。がこの間、逆に銘々膳は、あたかも反比例するかのように、減少の一途をたどりつづけている。そして、20年代のなかばごろを境に、両者の関係はまったく逆転するのである。

第2は、「チャブ台」が「(椅子式)テーブル」にとってかわられたのは、どうやら昭和46(1971)年のあたりのことであつたらしいことである。つまり、わが国は1970

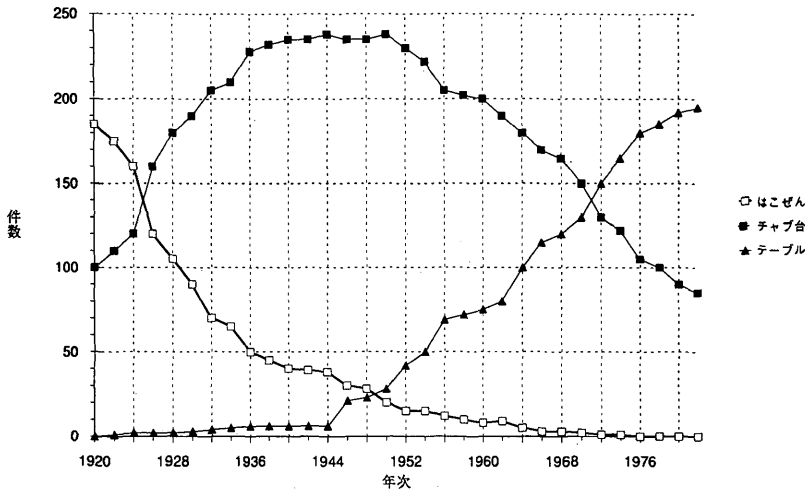


図3 食卓形式の移り変わり (その1)

年代にはいって、いよいよ“テーブル・ライフ”の時代を迎えたわけである。かつて銘々膳とチャブ台とが逆転したように、チャブ台とテーブルとが逆転してしまった。しかも銘々膳は、家庭から完全に姿を消してしまったのである。

第3は、“チャブ台ライフ”というのには、要するに「銘々膳」と「テーブル」のはざまにあって、せいぜい半世紀たらずだった、ということである。チャブ台の量的なピークの時期が、銘々膳がチャブ台にとってかわられたあたりと、ほぼ同じくらいの年代であったらしいことも、なにやら象徴的ですからある。もしかすると、「チャブ台」というのは、「銘々膳」と「テーブル」とのあいだの、一種の“つなぎ役”にすぎなかったのかもしれない。チャブ台は、いわばバラバラだった銘々のお膳を1か所に集め、その四隅に脚をつけて立ちあがったものであるとすれば、テーブルは、さらにチャブ台の脚を長くした姿形にほかなるまい。

もっとも、「チャブ台」の普及過程を「銘々膳」と「テーブル」との関係において相対化してみると(図4)、いささか異なった様相を呈していることも事実である。チャブ台はいまなお健在なのである。テーブルに押されて先細りの傾向にあることだけは間違いないとしても、まだまだ健気にも頑張っている、というべきであろうか。1980年代にはいって、減少の傾向にもややブレーキがかかってきたようである。チャブ台は、タタミの生活に欠かすことのできない装置のひとつである。タタミの生活が存続するかぎり、チャブ台もまた存続しつづけるのであろうか。

われわれはいますこし、別の角度からも検討をくわえておこう。「銘々膳」から「チ

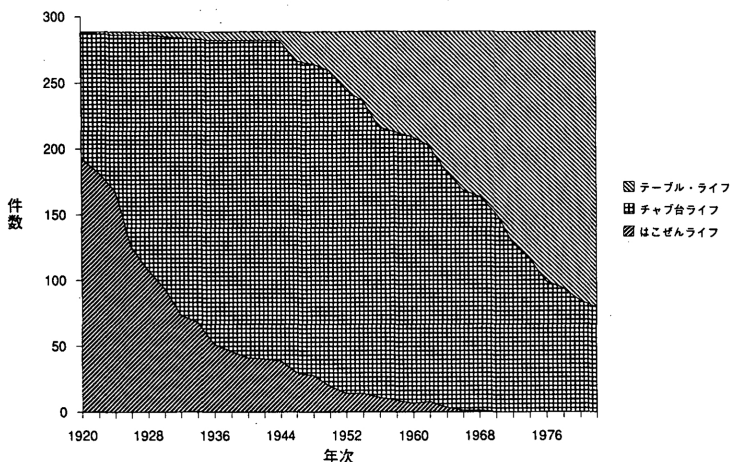


図4 食卓形式の移り変わり (その2)

「チャップ台」へ、あるいは、「チャップ台」から「テーブル」への移行を告げた被調査者のみを取りだして、それぞれの移行の平均値をもとめてみよう。

結果は、「銘々膳」から「チャップ台」への移行の平均値が1930.1であり、「チャップ台」から「テーブル」へのそれは1962.3であった。端数（ここでは月数）を切り捨てると、前者は昭和5(1930)年であり、後者は昭和37(1962)年であったことがわかる。

一般には、チャップ台の普及はおもに明治の末から大正にかけて（つまり、1900年の後半から1910年代にかけて）であり、テーブルの普及は、おもに公団住宅の影響になる昭和30(1955)年ごろであった、とされてきた。世相・風俗をうんぬんする識者の多くが、きまってその初期の流行現象に着目するように、チャップ台やテーブルをめぐるも、もっぱら初期の流行現象が語られてきたようである。「十年一昔」のたとえでいえば、ちょうど“ひとむかし”も“ふたむかし”も早すぎることに注意をうながしておきたい。

われわれのデータによれば、チャップ台の普及は1920年代から30年代の前半にかけてのことであり、テーブルの普及は1960年代から70年代の前半にかけてのことであった。およそのところとはいえ、われわれがこのほど発見した「昭和5(1930)年」と「昭和37(1962)年」という平均値は、さきの「大正14(1925)年」と「昭和46(1971)年」という数値とならんで、たいへん重要な意味をもっているようにおもわれる。

表6は、「銘々膳」が「チャップ台」にとってかわられる大正14(1925)年を境にして、チャップ台への移行期と住環境との関係を示したものである。われわれは、この表から、(1)チャップ台が普及しはじめたのは、やはり都市部においてであったこと。(2)おく

表6 ちゃぶ台への移行期と住環境との関係

住環境 ちゃぶ台になった 時期	住宅地	農業地	商業地	工業地	団地	海浜	合計
1924年以前	52 48.6%	28 45.2%	26 61.9%	2 50%	2 50%	0 0.0%	110
1925年～ 1940年の間	55 51.4%	34 54.8%	16 38.1%	2 50%	2 50%	4 100%	113
合計	107 100%	62 100%	42 100%	4 100%	4 100%	4 100%	223

れて農村部にひろがっていったこと。(3) いずれの時代にも、チャブ台の普及はサラリーマン家庭が中心であったこと、などをうかがい知ることができる。

なお念のために「農業地」と「商業地」だけを取りだして、カイ自乗検定をこころみると、5パーセントの危険率で有意差が証明された ($\chi^2(0.10)=2.706 < 2.811$ (自由度 $\phi=1$))。一般的な常識にしたがって、いちおう商業地を都市部というふうに仮定するならば、都市部と農村部では、チャブ台の普及に時間的な違いがあることを示しているわけである。大正期において、すでに農業地にもかなりひろがっているが、その多くが都市近郊農村であったことは、ことわるまでもないであろう。

2・3 チャブ台の普及要因

われわれの聞き取り調査の結果にもとづいて、ここで「銘々膳」から「チャブ台」へと変化した理由を整理しておこう。それは同時に、チャブ台の普及の要因をあげることでもあるだろう。次に列挙するのは、被調査者みずからによる説明をもとに、有効回答者145名より得られた理由の内訳を示したものである(ダブル回答も含む)。

- | | |
|---------------------|-------------|
| A. 社会的背景の変化による説明 | 99 (58.2%) |
| (1) 便利さ(合理化, 簡素化など) | 37 (21.8%) |
| (2) 時代の流れ(流行など) | 31 (18.2%) |
| (3) 衛生的 | 13 (7.6%) |
| (4) 物資の普及(台の普及など) | 10 (5.9%) |
| (5) 食べ物の変化 | 3 (1.8%) |
| (6) 民主的(家族の団らんなど) | 2 (1.2%) |
| (7) その他(終戦など) | 3 (1.8%) |

B. 個人的・家庭的理由による説明	71 (41.8%)
(1) 結婚・子どもの誕生	35 (20.6%)
(2) 家の新改築・転居	26 (26.5%)
(3) 家族構成の変化	10 (5.9%)
	計 170 (100.0%)

これらのうちで、「B-1) 結婚・子どもの誕生」、「B-2) 家の新改築・転居」、「B-3) 家族構成の変化」は変化のきっかけとなる事柄であり、「A-2) 時代の流れ」や「A-4) 物資の普及」などはかならずしも主体的な変化の要因ではないので、後にのべることとし、まずチャブ台での食事という、食卓そのものに理由をもつ事柄についてふれてみよう。

便利さ チャブ台を採用する以前の時期において、さまざまな型式のある銘々膳のなかで、民衆の日常の食卓としてもっとも普及していたのが箱膳である。家長や祖父母には、「あげ膳」、「さげ膳」といって主婦や使用人がサービスすることもおこなわれたが、原則として、箱膳やそこに格納されている食器の管理は使用者によってなされるものであった。食事がすむと、食器を湯茶ですすいで、ふきんでぬぐい、膳のなかに格納して、自分で膳棚にもどすのである。食器を洗うのは、月のうち2～3度のきまった日に主婦や使用人がおこなった。

箱膳は、食事のたびに出し入れするのがめんどうである。次にのべる衛生思想の普及にも原因して、チャブ台がもちいられるようになると、各家庭からしだいに使用人がへってきたこともあって、毎回の食事の終了ごとに全員の食器を主婦が洗うことになった。主婦の労働がかえって過重になったのである。それでも、チャブ台のほうが手間がはぶけて、便利な食卓であると考えられたようである。

チャブ台をもちいるようになって、共用の食器に食べ物を盛ることは、漬け物などにかぎられ、食べ物を個人別に盛りわけて配膳することが原則であったことは、箱膳の食事とおなじである。にもかかわらず、ひとつひとつの膳に配膳するよりも、チャブ台で一元的に配膳したほうが合理的と思われたようである。食事にかんする事柄を、すべて主婦にまかせる集中管理方式が成立したのである。醤油注ぎや漬け物のはいった鉢を手わたしする膳の食事よりも、手をのばしたらとることができるチャブ台のほうが、たしかに便利ではある。

たいがいのチャブ台が折りたたみ式なので、場所をとらないという生活の合理化・簡素化を理由にあげた回答もおおい。とくに都市居住者の場合は、膳棚をおく土間や

大きな台所をもたない住居形態に移行するとともに、格納に便利なチャブ台が普及したのであろう。

衛生的 明治以来、衛生思想の啓蒙が政府によっておこなわれ、学校教育をつうじて大正期には普及していた。すすぐだけで、ふだん洗うことをしない箱膳での食器管理は非衛生で不潔であるという理由で、チャブ台にきりかえたという回答もけっこうおおい。その背景には、上水道の普及、屋外の流しではなく、屋内に流し台がもうけられるなど、台所関係の水仕事の設備が変化したことがあげられる。

食べ物の変化 3例だけであるが、食生活の具体的な要因をあげたものがある。おかずが多様になって、箱膳にはのりきれないようになった。油を使用した料理がふえて、そのたびに食器を洗う必要ができた、というのである。一部の先進的な家庭では、昭和初期に食生活の量、質ともに変化していたことが、チャブ台への変化の要因となっていたのである。しかし、人びとの食事内容は基本的には銘々膳時代とおなじであり、日本人の食べ物のおおきな変化がおこるのは、1960年代以降のことである。

結婚・子どもの誕生 結婚を機にチャブ台を使いだしたという回答がおおい。結婚により、世代交替がなされ、姑の箱膳にかわって、嫁がチャブ台を使いだしたという事例、生家では箱膳であったが、嫁ぎ先ではチャブ台を使用していたという事例、逆に生家ではチャブ台であったが、嫁ぎ先では銘々膳であったという事例がある。嫁ぎ先で姑が死亡することにより、世代交替がおこると、嫁がチャブ台を使い始める事例もある。

子供が生まれ、危険であるというのでイロリをつぶし、チャブ台に切り替えたという説明のように、子供の出生がきっかけとなる回答も2例あった。

家族構成の変化 家族の人数が変化することによって、チャブ台が採用されたことを述べる回答が8例ある。小家族化、核家族化によって、チャブ台をかこんで食事ができる人数になったのである。使用人がいなくなったので、チャブ台を使いはじめたという回答も2例ある。

こうしてみると、チャブ台の採用には家族形態がふかいかわりをもち、結婚、出生、死亡といった家族形態の変化の節目を契機に、あたらしい食卓が導入されたことがわかる。

家の新改築・転居 家族の変わり目とならんで、家屋が変わるときが、チャブ台採用の契機となっている。第2次大戦以前の普通の日本人の住居のなかで、チャブ台はタンスとならんで、家具のなかで最大の部類のものであった。それを使用する空間の条件がととのわないことには、簡単に採用するわけにはいかないのである。銘々膳は土間の流し、膳棚、イロリの間などの空間構成と結びつく。チャブ台は、いわば茶の間を中心とする町の小市民的な住居空間との結合イメージをもつ食卓であるといえよう。

新・改築のとき膳棚のない空間構成の家にしたたり、転居によって上水道のある住居になる、転居を機に家具を買いかえるといった、住まいかたの変化が可能になった機会にチャブ台で食事をするをとりいれるのである。また、転居した先では、チャブ台の使用が一般的であったので、それをとりいれるということもあった。

時代の流れ チャブ台を採用した理由やその契機には、さまざまなものがある。それらの個別的要因をあげずに、「世のなかでそうなったから」、「流行しているから」という、ばくぜんとした回答をした人びとがおおい。それらは、不明確な回答として、無視してよい性質のものではないであろう。まさしく、時代がそのような方向にむかいつつあることを感じて、チャブ台に切り替えたものである可能性もある。箱膳よりも、チャブ台のほうが合理的な食卓であるという論拠を、それぞれの家庭ごとにつくりあげて、採用にふみきったというよりは、物質（とくにチャブ台）の普及にともなつて、他の家庭が使いだしたので、機をみてチャブ台を使うようになったというのが、ホンネをあらわしているのではなからうか。

民主的 「家族の団らんを身近に感じるため」、大正7～8年にチャブ台を使いはじめたという香川県の塩業者の家庭の例があるくらいである。石毛がすでに「チャブ台の出現」の章であきらかにしているように、チャブ台型式の食卓に民主的な団らんのイデオロギーを託した理想主義者たちの主張は、現実にはチャブ台を採用する要因として作用しなかったのである。

2・4 チャブ台ライフの作法

家庭における食事のしつけは、他のいろいろな領域のしつけにくらべて、厳しいのがふつうである。「おしゃべりをしてはいけません」、「食べ物をこぼしてはなりま

せん」、「きちんと座って食べなさい」、「そんな行儀の悪い格好で食べてはいけません」……などなど。各家庭では食事のたびごとに、子どもたちに対して細かい注意がなされつづけてきた。おそらく、いまでもそうであろう。

人間の食という行為は、根本のところ、神さまと結びついているといわれる。食事はもともと神前での共食行為であった。ために、すぐれて神聖かつ厳粛な儀式の時間なのであった。食事にまつわる作法が厳格であったとしても、ふしぎはない。

この神さまがいつしか後退し、人びとの日常生活から消えてしまって久しい。もはや今日では、「いただきます」とか「ごちそうさま」というたびに、神さまを想いかべる人は、ほとんどいなくなってしまった。宗教的な意味あいには、すっかり影をひそめてしまったのである。にもかかわらず、食事の中のしつけは、いぜんとして厳しいようである。作法はつねに、本来の意味あいを離れても、ひとり歩きするという性質をもっているからだ。

作法はまた時代とともに移りゆく。世につれて変化するものである。「食事のおしゃべり」をひとつ例にとってみても、かつては厳しく禁止されていたものが、近ごろでは「団らん」のチャンスとばかりに、かえって逆に奨励されるなど、質・量ともにさまざまな変化の傾向が予想されるのである。

わが国における食事の作法の伝統は、明治以降にかぎってみても、いったいどのように変容してきているのであろうか。われわれは、食事の中の作法をめぐる、「チャブ台ライフ」の時代を中心に、「はこぜんライフ」や「テーブル・ライフ」の時代と比較しながら、具体的に検討してみることにしよう。

食事のタブー われわれの聞き取り調査によれば、食事の中の作法の実態はすこぶる多岐にわたっている。そこでまず、食事の中のおもなタブー（禁止事項）をとりだして、各ライフごとにまとめておこう。ただし、姿勢や会話（おしゃべり）の作法については、それぞれべつに独立させて、くわしくあつかうことにしたい。

図5は、食事の中の禁止事項をグラフにあらわしたものである。各ライフごとにおのおのベスト3をあげてみると、以下のとおりである（カッコ内の数字はパーセントを示す）。

- ・はこぜん：①中座（34.3）、②トイレ（28.7）、③食べ物を残す（16.7）
- ・チャブ台：①中座（39.2）、②トイレ（23.2）、③音をたてて食べる（16.0）
- ・テーブル：①トイレ（27.3）、②ながら食べる（25.8）、③音をたてて食べる（16.7）

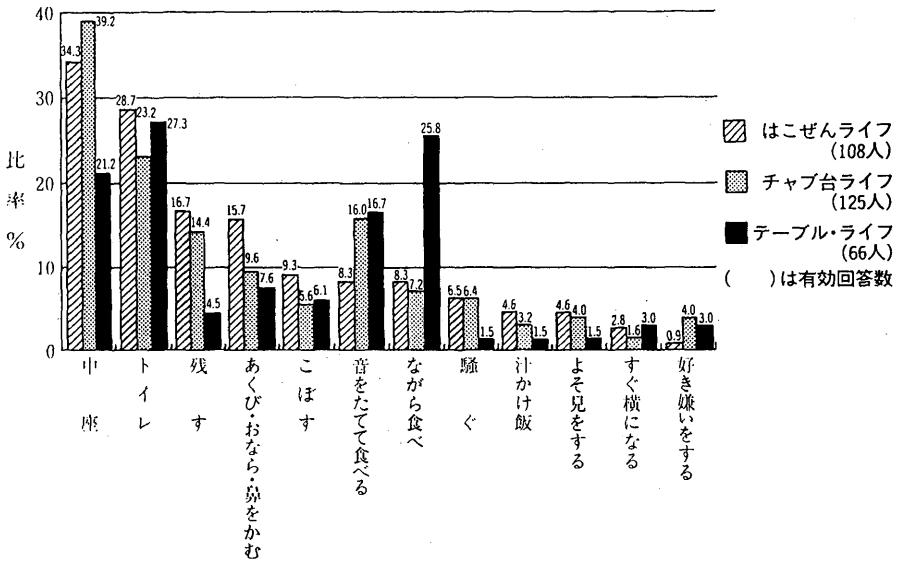


図5 食事中的タブー

われわれはこの図（および上記のベスト3）から、次の3点を読みとることができ
る。

第1に、概して「チャブ台ライフ」の時代のタブーは、「はこぜんライフ」の時代
と、あまり大きな差がみとめられないことである。両者ともに食事の中に「中座をして
はならないこと」、わけても「トイレに立つこと」がとよく戒められているが、この
2つの禁止項目を合わせれば62~3%となつて、だいたいおなじ比率であることがわ
かる。ついで「食べ物を残してはならない」という割合も、ほぼ同様である。

第2に、「チャブ台ライフ」の時代のタブーは、「はこぜんライフ」の時代とくらべ
るといずれの項目においても、禁止の度合いがいくぶんゆるやかになっていること
である。ただし、若干の例外がないわけではない。そのひとつは「音をたてて食べては
ならないこと」であり、もうひとつは「好き嫌いをしてはならないこと」である。こ
のふたつの項目にかぎって「チャブ台ライフ」は、「はこぜんライフ」といちじるしく
異つた傾向をみせているのである。「音をたてて食べてはならぬ」というタブーは、
西洋風のマナーの影響が、一般の家庭にもはじり始めたからであろうか。いっぽう、
「好き嫌いをしてはならぬ」というタブーは、たぶん、食糧事情の好転をあらわすバ
ロメーターでもあるだろう。「テーブル・ライフ」の時代ともなると、「食べ物を残し
てはならない」という項目がもはや激減しており、食べ物がいよいよ豊富になつてき

た事情をうかがわせている。

第3に、「テーブル・ライフ」の時代のタブーは、「チャブ台ライフ」の時代よりも、さらにいっそう禁止の度合いが弱まってきているが、「何かしながら食べてはいけない」という項目だけは、反対に群をぬいて高くなっていることである。テレビを見ながら食事をする家庭がふえている今日、かえってそれを禁じている家庭も、目立ってきている。現在の茶の間（食事などをする部屋）のしつけは、食卓だけでなく、テレビの影響を見のがすわけにはいかないであろう。

姿勢にかんするマナー 食事中の作法のうちで、姿勢をめぐるマナーの項目だけをグラフにあらわしてみたのが、図6である。

各ライフごとにベスト3をあげてみると、以下のとおりである。

- ・はこぜん：①正座（82.8）、②背すじを伸ばす（22.5）、③肘をつかない（11.2）
- ・チャブ台：①正座（82.3）、②背すじを伸ばす（21.0）、③肘をつかない（21.0）
- ・テーブル：①肘をつかない（56.8）、②背すじを伸ばす（31.3）、③正座（ちゃんと座る）（17.6）

食事中の姿勢については、なんといっても、正座が基本であろう。銘々膳ないしチャブ台の前に姿勢よく座るということは、かつては正座することと同義にはかならな

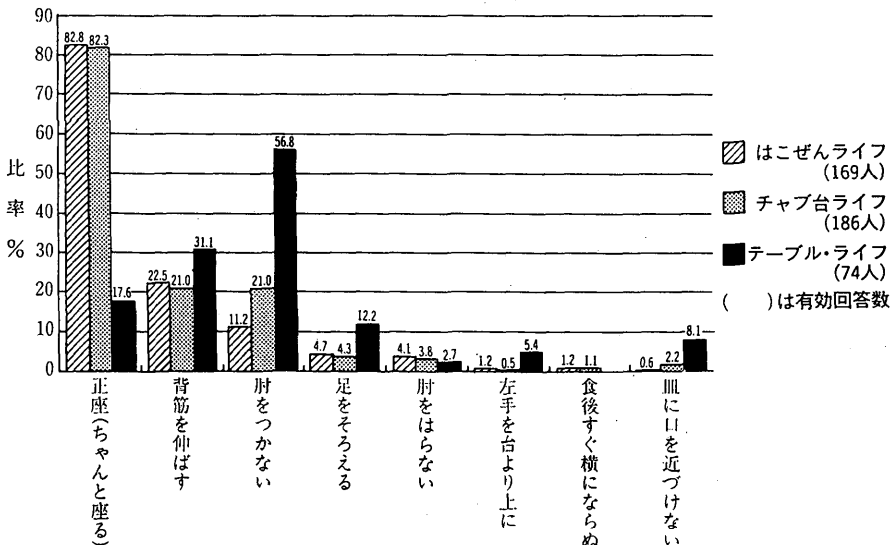


図6 姿勢にかんするマナー

かったからである。「チャップ台ライフ」の時代は、「はこぜんライフ」の時代と同様に、この「正座」のしつけがことのほか厳しかったようである。それは両者ともに、第2位の「背すじを伸ばすこと」をだんぜん引き離して、第1位をしめていることからあきらかである。

「テーブル・ライフ」の時代ともなれば、そんな事情は一変せざるをえない。はやい話が、椅子に腰かける生活様式には、正座という姿勢はまったく意味をなさないのである。もっとも、お年寄りのなかには椅子式テーブルになっても、椅子の上にとちょこんと正座している姿が時おり見うけられることはあるだろう。しかし、その姿勢を子どもたちにしていることは、もはや無意味であるにちがいない。

図6の示すところによれば、「テーブル・ライフ」において「ちゃんと座ること」を求めるしつけの度合いは、「チャップ台ライフ」とくらべて、4分の1以下に激減している。かわってテーブル・ライフにおいては、「肘をつかない」という項目が群をぬいて増加していることが注目される。「はこぜんライフ」(11.2%) → 「チャップ台ライフ」(21.0%) → 「テーブル・ライフ」(56.8%)の結果は、食卓の脚が長くなればなるほど、この「肘をついてはならない」という作法の重要性が増していることを、端的にあらわすものといえよう。

くわえて、「背すじをのび」し、「足(または脚)をそろえ」「左手を台より上にあげ」「皿に口を近づけない」ことなどが、各家庭にはテーブル・ライフの時代の新しい作法として登場、しだいに定着してゆくものとおもわれる。

食事中の会話に対する態度 もうひとつ、どこの家庭でも食事中に「正座」とならんでうるさくしつけられてきたのは、「会話(おしゃべり)」の作法である。この会話をめぐって、被調査者からのいくつかの回答をもとにしながら、多面的に検討してみよう。

図7は、食事中の会話に対する回答をグラフにあらわしたものである。各ライフごとにおのおののベスト3をあげてみると、以下のとおりである。

- ・はこぜん：①会話は厳禁(83.3)、②話してもよい(24.1)、③静かにならよい(19.4)
- ・チャップ台：①話してもよい(36.8)、②会話は厳禁(32.4)、③静かにならよい(13.2)、③口に物を入れたまま話すな(13.2)
- ・テーブル：①話してもよい(62.5)、②静かにならよい(15.0)、②口に物を入れたまま話すな(15.0)

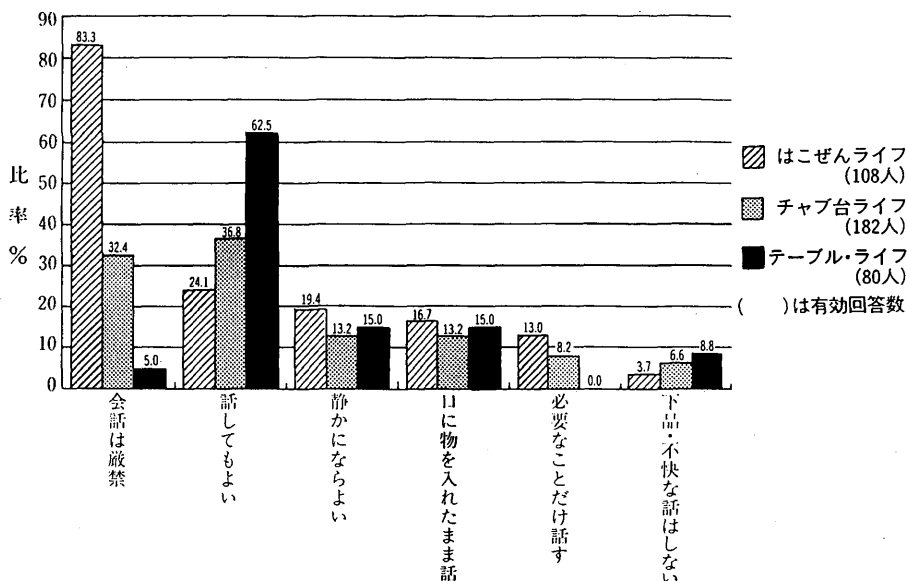


図7 食事中の会話に対する態度

図7(および上記のベスト3)の示すところによれば、「ほこぜんライフ」の時代においては、原則として食事中に「おしゃべりをしてはならぬ」(83.3%)という項目が、突出していた。たとえ「話してもよい」(24.1%)とされる場合でも、「静かにならよい」(19.4%)が、なるべく「必要なことだけを話す」(13.0%)よう要求されるなど、食事中の会話に対する規制の枠は、たいそう強固であった。食事のあいだ、家族のメンバーはおしなべて寡黙であった情景がしのばれようというものである。

次の「チャブ台ライフ」の時代においては、この食事中のおしゃべりに対する規制がかなり緩和されていることがわかる。けれども、「話してもよい」(36.8)という項目と、「会話は厳禁」(32.4)という項目とが、およそおなじくらいの割合で拮抗しており、アンビヴァレト(両義的)な回答をうつつし出しているところに、われわれは注目しなければならないだろう。チャブ台の生活は今日もおつづいていることを考慮すれば、このような結果は、ある意味で当然のことかもしれない。いわゆる“団らん”の情景からはまだ遠く、わけても戦前の家庭にあっては、食事中はいぜんとして寡黙だったようである。

「テーブル・ライフ」の時代にいたって、食事中のおしゃべりは、ようやく解禁となった。「会話は厳禁」(5.0%)の家庭はごく少数派となり、「話してもよい」

(62.5%) が3分の2をしめるまでになったのである。大声でしゃべったり、口に物を入れたままおしゃべりをしたり、不快な話をしたりさえしなければ、おおいにおしゃべりをしてもよろしいことになったわけである。食事中的会話を「必要なことだけ」にかぎる家庭が皆無であるのは、きわめて象徴的である。食事の時間こそは、家族のメンバーが一堂にうちそろい、食卓をかこんでの団らんのひとときである——との認識が、しだいに一般化してきたのであろう。

食事中的話題 食事にかわされる会話の中身は、はたしてどんなだったのであろうか。食事中的話題をめぐって、その内容ごとにグラフにあらわしてみたものが図8である。各ライフごとにおのおのベスト3をまとめてみると、以下のとおりである。

- ・はこぜん：①仕事のこと (42.5)，②世間話 (31.9)，③一日の出来事 (31.0)
- ・チャブ台：①一日の出来事 (41.0)，②世間話 (36.5)，③学校のこと (30.9)
- ・テーブル：①一日の出来事 (37.6)，②世間話 (36.2)，③学校のこと (34.2)

われわれは図8からも、いくつかの興味ぶかい事実をみてとることができる。ひとつは、「チャブ台ライフ」の時代にいたって、「はこぜんライフ」に支配的だった「仕事のこと」をめぐる話題がおよそ半分に激減し (42.5→27.0%)，かわって「学校のこと」をめぐる話題が激増していることである (18.6→30.9%)。あわせて「子供のこと」をめぐる話題が急上昇するようになってきたこと (3.5→8.4%) も、注目に

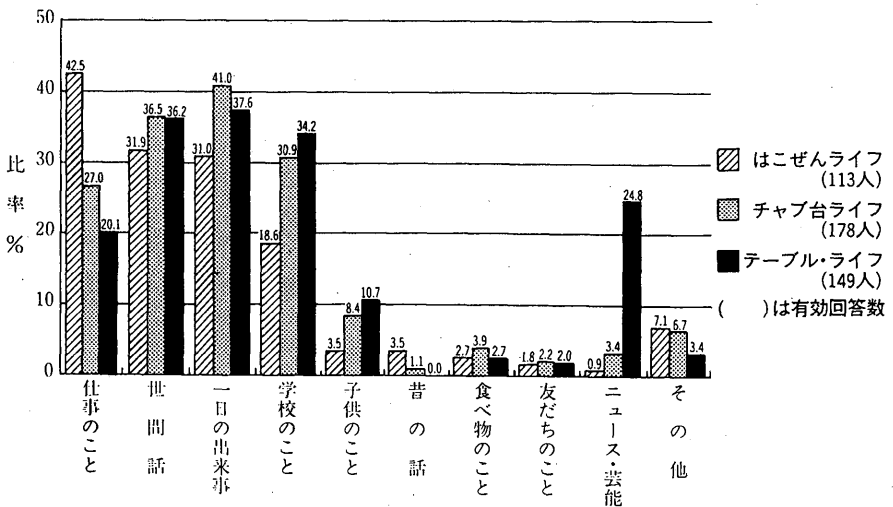


図8 食事中的話題

あたししょう。「はこぜんライフ」は、商家や農家におなじみの生活様式だったので、食事中はいきおい「仕事のこと」を話題にしあう機会でもあった。とくに農家にとっては、家族ぐるみの労働形態のゆえに、農作業が中心的话题であったにちがいない。

もうひとつは、「テーブル・ライフ」の時代ともなると、さらに「学校のこと」や「子供のこと」が多く話題になるばかりか、「ニュース・芸能」をめぐる話題が突出してくることである。家庭におけるマスコミの影響、とりわけテレビのそれは、ここでも「チャブ台ライフ」との違いを極立たせているのである。

話題の提供者 食事中の話題とともに重要なことからは、その提供者がだれであるかということである。これらふたつの問題は、相補いあう関係にあるものといえよう。そこで、家族の役割の属性ごとにグラフであらわしてみたのが、図9である。例によって、各ライフごとのベスト3をあげてみると、以下のとおりである。

- ・はこぜん：①父 (64.6)、②母 (22.0)、③子供 (19.5)
- ・チャブ台：①父 (40.9)、②子供 (32.2)、③母 (22.6)
- ・テーブル：①母 (47.6)、①子供 (47.6)、③父 (13.4)

図9からもあきらかなように、「はこぜんライフ」の時代には、食事中の話題は、もっぱら「父親」(64.6%)であった。「チャブ台ライフ」でも、「父親」(40.9%)の割合がけっこうたかいことに注意したい。食事中のおしゃべりに対する規制の度合いは弱まったとはいえ、いぜんとして「父親」のほうが「母親」(22.6%)よりも主役

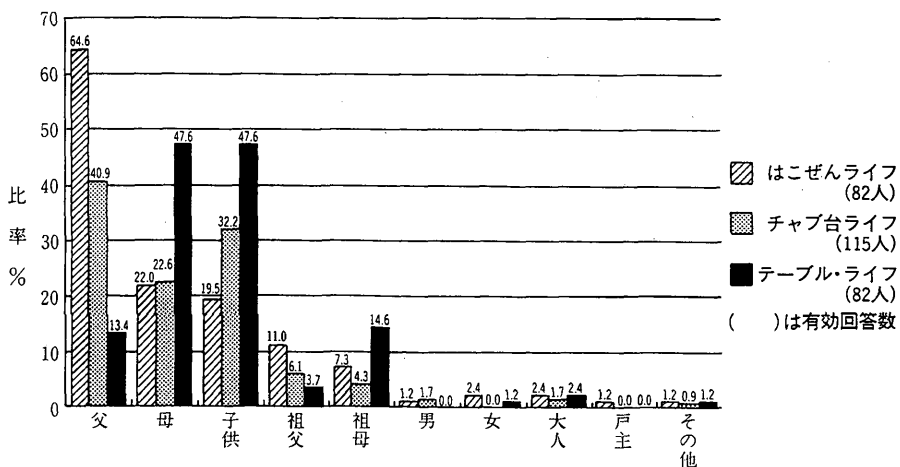


図9 話題の提供者

だったのである。もっとも、「チャブ台ライフ」にあっては、「はこぜんライフ」にくらべて、「子供」のしめる割合が大きくなってきていること（19.5→32.2%）も、さききのべた「学校のこと」をめぐる話題の激増ぶりと軌を一にしており、見のがすことのできないポイントのひとつであろう。

それが次の「テーブル・ライフ」の時代ともなれば、様相が大きく変わっていることがわかる。「父親」（13.4%）の存在は小さくなってしまい、かわって「母親」（47.6%）の存在が圧倒するようになった。「子供」（47.6%）はますます会話の中心をしめるようになっていく。地味な数値ではあるが、「祖母」（14.6%）の存在感のクローズアップぶりも興味ぶかい。反対に「祖父」の存在感は、「はこぜんライフ」（11.0%）→「チャブ台ライフ」（6.1%）→「テーブル・ライフ」（3.7%）と、減少の一途をたどっていく有様が、なにやら象徴的ですからある。イエの規制力の弱体化は、もはやおおうべくもないのである。

文 献

井上忠司

1988 「食卓の家庭史」 井上忠司『「家庭」という風景——社会心理史ノート』（所収）
日本放送出版協会

梅棹忠夫

1980 「食事学入門」 梅棹忠夫ほか『食事の文化 世界の民族』朝日新聞社
1989 『情報の家政学』ドメス出版（再録）